

森のふくろうへの独言

柳田国男生誕百五十年頌

小 田 富 英

届くか

わが無音の独言

聴けるか 翁の再生の詩^{うた}

翁生まれて百五十

目出度いわけでもなからうが

今ここにいたら何と言う

時々想いをめぐらすのも悪くない

百五十とはそういう数だ

では

無音の詩片でそれが可能か

試してみるのも悪くはなからう

君は

翁が農政十傑とよばれていたのを知っているか

きつと三倉の門番として

天災でなく人災で

蓄えに手をつけることは許さなかった筈

生活を彩る白の色彩にも格差の影が落ちていく

今のこの国は

翁のいた国ではないのだ

君は

翁が目の前で老骨に鞭うっていますと言われても

微笑みをかえし

小さ子がまあるい言葉で

自分の思いを語れるまでは

倒れるわけにはいかないと鞭うっていたのを知っているか

四角い言葉で無益な議論をする老人は早く退場してもらおうと

新年のお祝いの言葉として

翁の口癖、百年の因縁を結ぶには

あと三十有余

そのころまでにこの国は再生するか

若者に翁の心を残すため

私も

独りよがりの

無音の詩片をあと少し

まあるい言葉で書けるまで